第2回ミュージアムエデュケーター研修

博物館利用？学校連携？
ーよりよい利用形態に向けてー

東京国立博物館　鈴木みどり

学芸員のみなさんにお聞きします

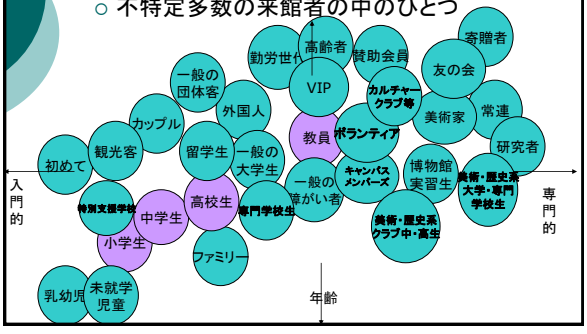
- 学校の授業で、博物館に見学に行ったこと、覚えていますか？
- どんな体験ができましたか？
- 学芸員になるきっかけになりましたか？

今日、一緒に考えたいこと

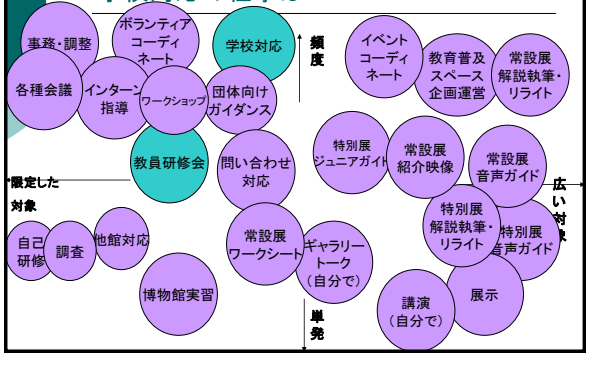
- なぜ、学校対応が必要？
- 必要なのは博学連携？学校の博物館利用？
- 学校をターゲットにした、効果的な博物館利用のすすめ

博物館にとって学校はどんな存在？

- 不特定多数の来館者の中のひとつ



ミュージアムエデュケーターにとって学校対応の仕事は



学校対応で困っている点

- 自主的に来たわけでないので、**興味なさげ**
- **マナーが悪い**（他の来館者の迷惑にも）
- **滞在時間が短い**、決められているので、じっくりと見学してくれない
- 館内設備に**食事、休憩、荷物置き場**などがない
- 対応職員が**少ない**。
- 教員からは**無理な要求**や、**丸投げ**のことも。
- 入館は無料、または減額で、博物館の**収入利益にはなりにくい**

プラス面は？（建前も含む）

- 家族で来るかもしれない→来館者増、収入にはつながる
- 将来、来館者になるかもしれない→収入につながるかも。寄贈者や賛助会員なるかも
- 「対応」することで、マナーを教えられる
- 「対応」することで、興味をもって、見学できる
- 児童生徒に伝統文化を伝えることは必須

学校にとってのマイナス＆プラス面

マイナス

- 授業時間を割けない、手配や準備が大変、予算が無い
- 生徒が飽きる
  …解説が難しい、つまらない、触れられないなど
- 生徒が走り回ったり、作品をこわしたりしないか心配
- カリキュラムと合わない

プラス＋

- 学校の授業で習ったものの、**本物の作品**が見られて、**実感が得られる。**
- **関連の作品**も見られ、時代などのつながりが持てる
- 博物館に入ったら、博物館職員まかせにすればよい？

学校対応や学校連携って大変？

- お互いの言い分はあるけれど、両者でハッピーに仕事をしましょう！

東博の児童・生徒対応の歴史

- 昭和24年　組織の中に、団体係、**児童係**を設ける
- 昭和24年　「子どものための文化史展」(展覧会)

サンマースクール、少年少女のつどい、自由研究の会

- 「**少年少女のつどい**」→昭和28年～46年　**教員と連携して**毎月実施。教科書に出てくる文化財など。
- 「**小・中学校団体解説日**」予約制で美術鑑賞の手引

ただし、1時間が長い、決まった日しか行わないので不便。

- 昭和29年　**教師のための**日本考古学**講座**・仏教文化史講座・文化史講座（学年末の休暇時）→教員研修として位置づけ。
- 昭和43年　普及展示室。教師の教材用の資料の貸出も。

博物館経営において、学校対応とは

- 各博物館での年間計画、実績報告、自己点検評価などにもかかわってくる
- 多ければ問題なし、少なければ、学校対応数を増大するための案が必要に。

例：教育活動に関しては、各種の講演会や講座が実施されているほか、親子ギャラリーやキャンパスメンバーズ活動など児童生徒・学生を対象とした教育学習プログラムも推進しており、評価できる。キャンパスメンバーズの活用については、文化事業の裾野を広げる上で若年層の関心を高めることが重要であり、学生が特別展に入りやすい環境を整えるべく、更なる工夫を検討していただきたい。

「独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会報告書　平成23年度」

館内の説得のために知っておきたい「博物館で学校利用を推進する必要性」

- 評価されるのは、学校数、対応児童・生徒数など→数値以外にも評価を盛り込むこと

例：学校貸出キット「きゅうぱっく」の貸出は、今年度から貸出範囲を明確に「全国」とし、それに伴い貸出期間も2週間に延長した。東京、京都など遠方からの貸出依頼が増加したほか、東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県南三陸町からの貸出依頼もあり、応えることができた。（九博）

- 「若年層」や未来の世代への教育にも力を入れていること→館としてのアピールポイントになることを、上司にも理解させる
- 児童・生徒が利用しにくいポイントの改善を要求してみる→食事できる場所など。

学校の役割

基本的・基礎的知識と技能の習得

活用して課題解決

思考力・判断力・表現力・主体的な学習の態度を身につける

考え方・学び方の方法の習得

知・徳・体の生きる力

博物館の役割

すべての人々に、文化財を通じて美術・歴史・文化の価値を伝え、それを未来へ伝えていく

自分なりの価値判断、時代や国・民族を超えたものへの尊重、創造・想像力

生きる力 心の豊かさ 自他の尊重

学校と博物館の学びの違い

	学校	博物館
対象	年齢層が決まっている継続性のある集団	不特定、バックグラウンドもさまざま
時間	約1時間	好きなだけ(短くても長くても) →家族、生活の中でも継続
学習単位	クラス、グループ	個人、または複数
特徴	直接体験は少ない	資料、体験から感じ、学ぶ
学習のゴール	設定あり	設定無し
テーマ	決められている	各人の興味に応じて自由
学び方	受動的な傾向	能動的

実際の利用方法

- 授業の一環として
- 特別活動として
  - ・総合的な学習の時間、グループでの調べ学習
  - ・職場体験、キャリア学習の一環
  - ・クラブ活動の一環
- 出前授業
- 教材の貸し出し

- 事前事後も含めた「連携」は、なかなか対応が難しい
- →学校対応数が多く、学校対応だけに時間が避けないため、すべてに0から始めることはできない
- →「連携」ではなく、より良い「対応」のための「利用者」としての意見を聞く

利用者としての学校を知る

- 博物館と学校で求めているもののずれ
- どうしたら、学校が利用しやすいか、利用者としての学校のニーズを知る

たとえば、東京国立博物館でよく聞かれるネガティブコメント

- 若い人向けの場所ではない
- 生徒が来ても、つまらなそうにすぐ出てくる
- 広すぎて、どこからみてよいかわからない
- 作品に興味がわかない
- 解説文が専門的すぎる
- 楽しい雰囲気がない

ネガティブな意見から、ポジティブな対応へ

- 若い年代に向けたプログラムの充実
- 学校向けのプログラムの充実
- 博物館に親しむための工夫
- 作品に興味がわく展示やプログラム
- 解説が容易に伝わる工夫
- 楽しい雰囲気づくり

来館者の満足のために

来館者のニーズを知る

期待していたことができた

ニーズにあわせたチョイスを用意しておく

ニーズ以外の楽しみ方も、さりげなく仕込んでおこう

期待していた以上のことができた

さりげなく自分たちの意図も伝えちゃおう

新たな利用方法

- 居場所としての役割
  学校や家庭の問題点を解決できる場所のひとつになれるか？
  例：高校生プログラム
- 継続的な利用に向けて
  単発のプログラムで無く、興味を持った児童・生徒が続けてこられる仕組み

学校をターゲットにした効果的な博物館利用のすすめ

- 教員との意見交換会、教員研修会、見学会、事後アンケートなど

↓

- 互いのニーズや可能性を知り、より効果的な利用方法の提案へ
- 継続的なコミュニケーションで、信頼関係を構築
- 継続できるサポート体制

ニーズに合ったスクールプログラムを提案

↓

目的をもった博物館利用
目的にあわせた博物館利用

↓

〇博物館を有効利用し、充実した博物館体験に
〇効果的、効率的な学校対応に

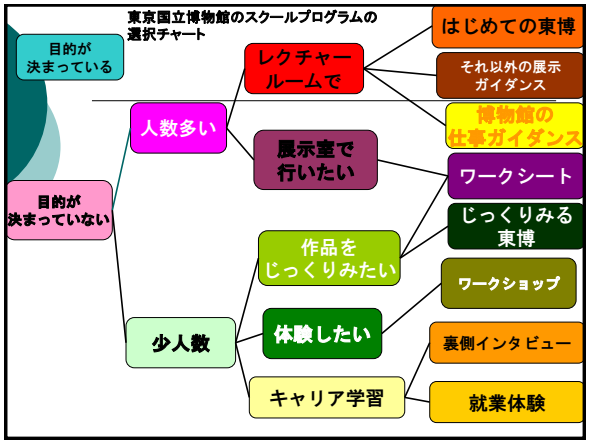
東京国立博物館スクールプログラム

①レクチャールームでのプログラム ×4種類
②展示室でのプログラム ×2種類
③ワークショップ ×3種類
④キャリア学習のためのプログラム ×3種類

プログラム選択の流れ

何をしたい？
人数は？
滞在時間は？
何に興味がある？
いつ来館する？

諸条件確認のうえ、プログラムをおすすめ



その他

- 授業でも使えるワークシート
- 他の教科等でも使える博物館利用の提案
  →利用しやすい教科・内容で利用

たとえば、東京国立博物館の場合、
美術・地理・歴史・理科・環境・技術・工芸・書道・英語・国語・建築・国際交流・バリアフリー・キャリア教育などでも利用

- 教員の憩いの場所にも